

政治的プロジェクトとしてのメディア教育  
—P. ギルロイからの示唆—

時 津 啓

Media Education as Political Project: From Paul Girloy

Kei Tokitsu

This paper reinterpreted participatory media education as a political project to change the framework of media education. In media education, media literacy should not just be a matter of individual responsibility, although this is what media literacy is often taken to mean. Media literacy should be a matter of communication.

First, we focused on the concept of the public sphere in J. Habermas, and we clarify the sequence between his theory and citizenship education. Following these, political actors (citizenship) are formed through language communication, while normative consciousness is also built socially.

However, as far as language-centered media education is concerned, we are at risk of eliminating minorities and considering about media education without thinking of minorities. This paper sought a way of cultural formation using media other than languages according to the perspective of P. Gilroy's view. According to him, British blacks form cultures using not only languages but also instruments, analog records. We focused on the representation of "race" drawn by Gilroy and reinterpreted Buckingham's educational practice.

Gilroy proposed the possibility of constructing another public sphere through cultural work, not a public sphere like Habermas. This is not the possibility of reflecting on their own media experience or media use at the individual level but the possibility of building normative consciousness with others through cultural work. This paper revealed that Buckingham's attempt has the possibility of constructing a new public sphere.

Key Words (キーワード) :

Media Education (メディア教育), Paul Girloy (ギルロイ),  
Citizenship Education (シテイズンシップ教育)

所属名 (広島文化学園大学学芸学部・Faculty of Arts and Science, Hiroshima Bunka Gakuen University)

## はじめに

本研究の目的は、イギリスのメディア教育学者 D. バックingham (David Buckingham) の教育実践を再解釈し、政治的プロジェクトとしてメディア教育を捉え直すことにある。

そもそもメディア教育は、政治とのかかわりの中から生じたと言えよう。例えば、カナダにおけるメディア・リテラシー教育の教科書には次のような記述がある。「メディア・リテラ

シーに取り組む者は、メディアをクリティカルに読み解く知力を育成するなかで、メディアにアクセスしたり、主流メディアにない情報をみずからつくりだしたいと望むようになる」(オンタリオ州 2000: 21)。ここで言うクリティカル(批判)とは、メディアからの情報を批判的に読み解くことを指している。さらに言えば、この論点は現代を代表する哲学者や思想家が問題にしてきた論点でもある。例えば、フランスの社会学者ブルデュー (Pierre Bourdieu) と

ドイツの哲学者アドルノ (Theodor W. Adorno) を取り上げよう。ブルデューは言う。「テレビは、隠している。違うものを見せることによって隠している。あるいは人々がそれを見ないようなやり方で、現に見せているものが意味を持たないようなやり方で見せることによって、隠している」(ブルデュー 2000: 27)。アドルノは「テレビの罠に騙されない、つまりイデオロギーとしてのテレビの罠にはまらないようにテレビを視るにはどうすればよいか」と問う (アドルノ 2011: 77)。つまり、「マスメディアに対して批判的であれ」と。

それに対して、バッキンガムが考える批判の内実はより広義なものである。「批判的で行こう」というブログにアップされた記事の中でバッキンガムは次のように述べている。「批判的思考とは、知識を分析し、総合し、評価することに関するものである。批判的思考は明らかに論理を含んでいる。(中略) 批判的思考は安易な仮定に対して疑問を持つこと、そして問題に対して別の視点から考えることを含んでいる」(Buckingham 2018a)。

ブルデューやアドルノに比べて、バッキンガムの主張は曖昧で判然としない。2018年10月11日に広島大学で行われた講演の中で広島大学坂越正樹は次のようにバッキンガムへ質問した。「批判的であることは、メディア教育のみならず、教育学のキーワードでもあった。メディア教育における「批判的である」とはどのようなもので、具体的にどのようにすればよいのか」。バッキンガムはこの問いに次のように応答する。「メディアに対して批判的であることは本当に困難なことである。例えるならば、それは魚に自らが生きている海に対して自覚的であると言っているようなものである。これまでのメディア教育が見えないものを見えるようにするものであったとするならば、私は逆のベクトル、すなわち見えていたものを別の形で示すことで批判的なものは形成されるように思える」(Buckingham 2018b)。

ブログの中でバッキンガムは「身近なものに知らないものに変える」(もしくは「異化」と表現している (Buckingham 2018a))。より具体的に述べるならば、「批判的思考は『省察』のプロセスであり、その過程の中で私たちは絶えず自らの先入観や解釈、結論に疑問を持ち続けなければならない。それは早急な判断を避け、私たちが知っていることについて私たちが求め

る限界を認識することであり、よって私たちが実際にどの程度確認しうるのか知ることである」(Buckingham 2018a)。

さらに重要なことは、バッキンガムが次のように述べていることである。「批判的思考は服従や無関心を正当化するものであってはならない。メディア環境がもたらす試練にどのように対応するか、それを人々に教えるだけでは不十分である。こうしたことは単なる個人の責任の問題などではない。しばしばこれが『メディア・リテラシー』というものだと思われるのだが」。さらに、バッキンガムは言う。「メディア教育は批判的な理解の促進を追求する。しかし批判的理解は行動に繋がらなくてはならない」(Buckingham 2018a)。すなわち、メディア教育は、個人の資質・能力に還元できるものではなく、メディアからの情報が社会を形成し、その社会に対して批判的であることは社会の形成に結びつくものであると考えるべきと言えよう。しかしながら、彼はこのような社会形成のプロセスと授業実践との関連や個人レベルの学習に還元できない新たなメディア教育の可能性を具体的には明示できていない。

以上を踏まえて、本研究は個人の資質・能力を育成するメディア教育をこえて、政治的に新たな公共圏を構築するプロジェクトとしてメディア教育を捉え直す。そして、それがいかなるものとして構想できるのかを具体的に指し示す。SNS時代に入り、個々人が情報を受信するだけでなく、より一層情報を発信する時代となった。しかしながらここでも強調されているのは、情報モラルをはじめとした情報発信者としての個人の資質・能力である。

重要なことは、メディアからの読み解きにしろ、メディアを通じた情報発信にしろ、メディアと教育の関係を個人の資質・能力に還元できないことである。むしろ、個人の資質・能力がいかに社会の形成や集団意識に作用するのか。メディアを読み解き、メディアで情報を発信した「後のこと」を問うべきだろう。

本研究は、この「後のこと」が公共圏の構築する関わることを論証するものである。事実、バッキンガムはイギリスにおいてシティズンシップ教育がカリキュラム化された翌年『市民を作る』を出版し、シティズンシップ教育とメディア教育の関連を分析している。公共圏の参加者である市民を教育することとメディア教育はいかに接合可能なのだろうか。さらに、バッキ

ンガムの主張にはどのような限界があるのか。本研究はこれらを検討することを通して、政治的プロジェクトとしてのメディア教育の可能性を明らかにする。

## 第1節 言語とシティズンシップ教育

### 1. シティズンシップ教育論におけるバッキンガムの位置づけ

1979年以來 M. サッチャー (Margaret Thatcher), J. メジャー (John Major) と保守党政権が続いた。T. ブレア (Tony Blair) 率いる労働党は、1997年、保守党政権から政権を奪取した。シティズンシップ教育は、この労働党政権下で1999年にカリキュラム化された。シティズンシップ教育はブレア政権で諮問委員会が組織されカリキュラム化が進行する。シティズンシップ教育の誕生とカリキュラム化はブレア政権の影響下で生じたのである。

そもそもシティズンシップ教育は、「社会で能動的に活動するための自信や責任感」の育成を目標に掲げ、1999年にイギリスのナショナル・カリキュラムにおいて必修科目として設定された。ブレア政権下で英国初の盲目の閣僚として教育雇用大臣に D. ブランケット (David Blunkett) が就任する。そして彼の恩師である B. クリック (Bernard Crick) を委員長にシティズンシップ教育のための諮問委員会が組織される。その最終答申が『クリック・レポート』である。大久保正弘にしたがえば、イギリスのシティズンシップは、「投票率の低下をはじめとする若者の政治的無関心や、ニートの問題に代表される社会的無力感、および若者の反社会的な行動などの深刻な諸問題」(大久保 2012: 20) を背景に導入された教科である。『クリック・レポート』は次のように宣言する。

「私たちは、イギリスの政治文化に対して、国・地域の側面における変革をもたらすことを最低限の目標とする。それは、一般社会に影響を及ぼす意思・能力・知識を有し、また発言や行動に先立って情報を慎重に評価できる批評眼を有した、能動的市民 (active citizens) としての自覚を人びとが持つようになることである。あるいは、現存する最も優れた伝統的な社会参加や公共奉仕を若い人々の間に徹底的に形成・普及させ、かつ個々が自身の集団の中で自信を持って新たな参加・活動のスタイルを創り

出せるようにすることである」。(The Advisory Group on Citizenship 1998: 7=2012: 113-114)

『クリック・レポート』では、批評する力を求めている。それが結果的に能動的市民としての自覚を持つことにつながり、社会や集団に対して新たな参加の形態をもつことにつながるからである。バッキンガムは2000年に『市民を作る—若者、ニュース、政治—』を出版する。シティズンシップ教育がカリキュラム化された翌年である。

この著作の中でバッキンガムは、ニュースに着目している。彼によれば、市民的な責務の感覚に導かれ、世の中の出来事を認識するために新聞やテレビと接している理性的な読者や視聴者ばかり存在するわけではない。なかでも若者の多くは、ニュースに対して快楽を求め、受動的な消費を通して、自己決定やアイデンティティの形成を模索している (Buckingham 2003b (2000): 30)。このように若者たちは、地域社会や家族あるいは学校空間の中でのみ、アイデンティティを形成しているわけではない。快楽主義に裏付けられたポピュラーなメディア空間のなかでもアイデンティティを形成している。

この考えは、『クリック・レポート』と明らかな差異がある。というのも、『クリック・レポート』において重視されるのは、理性にしたがった政治判断や政治的選択である。例えば、『クリック・レポート』ではカリキュラム構想として、「社会的道徳的責任」「政治的リテラシー」「コミュニティへの関与」を重要なものとして位置づけている。とりわけ「社会的道徳的責任」は、市民性における必要不可欠の条件としているのだ (The Advisory Group on Citizenship 1998: 40=2012: 175)。シティズンシップ教育は、社会問題、政治問題へコミュニケーションを通して能動的に参加し、社会・政治の構造自体を組み替えていくことを目指している。それに対してバッキンガムが重要視するのは、理性に基づき議論を活性化した空間ではなく、快楽に基づくポピュラーなメディア空間である。「政治は消費文化の拡大の場所になってしまった」(Buckingham 2003b (2000): 22)。これがバッキンガムの現状認識である。

ここでバッキンガムと同様にイギリスのメディア教育を牽引してきたマスターマン (Len



Masterman) の見解を参照しよう。マスターマンによれば、「普通選挙は、マスメディアの外部で生じているイベントではなく、マスメディアの都合を優先させて討論会や視察が計画され、選挙の争点や勝敗を左右するメディア・イベントそのものである」(Masterman 1989 (1985) : 11=2010 : 17-18)。メディアは選挙などの民主主義のプロセスを報じているだけではない。むしろ、民主主義のプロセスがメディア内部に存在し、選挙はメディア・イベントとしてみなされ得る。このような現状は、マスターマンにとって危機的なものであった。というのも、民主主義の中心を担う市民の政治判断や政治的選択が私的な快楽に基づくならば、民主主義の根幹が消費的欲望や欲求に規定されることになるからである。マスターマンはこのような認識の上で、生徒はメディア・テキストを読み解き、それが誰の利益のために、どのようなプロセスで、最終的に作られたのかを問う必要があると考える (Masterman 1989 (1985) : 30=2010 : 41)。

それに対して、バッキンガムは次のように説明する。市民の概念は、良質な公共性を謳い文句に、一部の人にのみ開かれた公共圏を構築するために政治利用された (Buckingham 2003b (2000) : 32)。例えばニュースは、ポピュラー文化が学校文化から疎外され続けてきたのとは異なり、時として学校文化と一体化してきた。ニュースは、「学校教育にとって役に立つ情報源」としての側面もあると理解された (Buckingham 2003b (2000) : 60)。もちろん、バッキンガムも認めるように、生徒たちの視聴パターンに注目するならば、ニュースと学校文化を同一視することはできないだろう。なぜなら、ニュースは国内外の出来事や政治、経済、社会動向を伝えているが、生徒たちはこれらニュースと目的的、集中的に接しているわけではないからである。

マスターマンは、生徒らがニュースへ目的的、集中的に接触し、それをテキストとして読解することを目指す。この点は、『クリック・レポート』の目指すものと一致している。それに対して、テキスト分析によってニュースの政治性を問う前に、ニュースそれ自体がいかに学校教育と一体となり、一部の人にのみ開かれた公共圏をいかに構築したのか。バッキンガムはこの点を問う。バッキンガムが乗り越えようとするのはマスターマンの見解である。バッキンガムが

問題視する点、すなわちニュースが学校教育と一体になり、一部の人にのみ開かれた公共圏を形成していることを考慮するとき、ハーバーマスを想起するのは的外れではないだろう。なぜなら、ハーバーマスが理念型として取り出す公共圏概念は『クリック・レポート』が求めるものと重なり合うと考えるからである。さらに言えば、政治主体が言語を中心としたメディアを介して公共圏を作り出し、公共圏において議論し合う。このハーバーマスの公共圏概念は、マスターマンの読解を中心としたメディア教育とも重なり合う。

## 2. コミュニケーションを通じた公共圏の構築

ハーバーマスを簡単に紹介しよう。ハーバーマスは、ドイツの哲学者で、M. ホルクハイマー (Max Horkheimer) や T. アドルノ (Theodor W. Adorno) からフランクフルト学派第一世代の批判理論を継承したフランクフルト学派第二世代を代表する人物である。ハーバーマスは、『公共性の構造転換—市民社会の一カテゴリーについての探究』の中で、18世紀ヨーロッパのコーヒーハウスやサロンに自発的に集う人々に公衆の姿を見出した。個人的な利害関係や利潤、政治的な立場の差異をこえて、彼らは公共的な討論を行ったことを指摘している (Habermas 2013 (1990) : 122=1994 : 86)。これこそ、ハーバーマスが歴史的に抽出した公共圏モデルである。

バッキンガムは『市民を作る』の中で、ハーバーマスが理想としているのは18世紀の公共圏であり、それは社会的階級やジェンダーの面で高い制限があると解釈している (Buckingham 2003b (2000) : 23)。同様の解釈は、これまでカルチュラル・スタディーズにおいても行われている。すなわち、ハーバーマスが18世紀のコーヒーハウスやサロンを理想化したために、その公共性が西洋中心主義である、と (Girloy 1993b : 42=2006 : 89)。しかしながら、本研究がハーバーマスを取り上げ検討する意味はバッキンガムの試みとハーバーマスの試みが異なっているからではない。むしろ、ハーバーマスの議論あるいはそれに対する批判を踏まえることで、バッキンガムの課題をより具体的に明らかにできると考えるからである。

ハーバーマスは言う。「コミュニケーション的な言語使用は、この関係 (文と事象内容との関係：引用者) が他の二つの関係 (「なにかの

表現である」という関係、および「なにかをだれかとともに共有する」という関係)とどのように結びついているかという問題を私たちに提示する」(Habermas 1983: 34=2000: 44)。この視座に基づくならば、教育の過程は日常生活、すなわち生活世界の基盤の上で、「大人と子どもそして子どもと子どもが共に当事者として属している生活世界について理解を打ち立てていくこと」(渡邊 1999: 98)と言える。これらにしたがうことで、個人レベルの市民性の発達ではなく、個人とその環境(社会・政治)をセットで相互作用的に変化させる可能性を考えることが必要になる。

教育学者の渡邊満は、教育学的にハーバーマスを受容した後、自らの教育実践とシティズンシップ教育の連続性を次のように述べている。シティズンシップ教育はインドクトリネーション(教え込み)を回避し、市民社会のとらえ方、それとのかかわりにおいて適切な学習や教育についての基本的な考え方を見直している。この見直しを支えるのが行動とことばを統合する存在としてのコミュニケーションである(渡邊 2015: 289)。そして、次のように結論付けている。シティズンシップ教育から学ぶべきものは、学習方略と教育方略のイノベーション(革新)である。この革新とは、「話し合い、討論、討議(課題解決としてのコミュニケーション)であり、学習の射程範囲は、道徳的問題にそくして課題を構成し、その課題の解決に求められる諸条件を探究、そして解決に取り組むために必要な思考力と判断力とそのために必要なコミュニケーションスキルの育成である」(渡邊 2015: 290-291)。渡邊は、ハーバーマス理論の受容の先に、イギリスのシティズンシップ教育を位置づけ、両者を接合することで、日本における道徳教育を方向づけていこうとしている。

このようにハーバーマスの考えにしたがうならば、市民性の育成は個人の資質・能力に帰するものではなく、個人と個人のコミュニケーションによって構築される環境、すなわち公共圏と個人との相互作用によって育成されるということになる。もちろん、バッキンガムが言うように、その公共圏は一部の人のみに開示されている制約をもっていた。しかしながらこの制約の問題点は、公共圏の構築に一部の人のみしか参加できないことではなく、コミュニケーションの形式もいわゆる言語的なコミュニケー

ションに制約されている点にある。バッキンガムはこの点を看過してしまう。さらに言えば、ここで言うコミュニケーションの制約とは、決して言語能力の有無とは限らない。イギリスの文脈で言えば、英語のネイティブ・スピーカーとして生まれ育った白人と同じく英語のネイティブ・スピーカーとして生まれ育った黒人は、同じ公共圏を構築したのだろうか。あるいはその構築に参加することができたのであろうか。

## 第2節 言語と人種

本節では、カルチュラル・スタディーズの人種に関する議論を取り上げたい。この議論に注目するのは次のように考えるからである。第一に、ここでは言語以外のメディアを通じた表象を問題視しているからである。第二に、この議論が人種、とりわけイギリス黒人の表象を問題にしているからである。イギリス黒人とはイギリスで生まれ育ったイギリスに住む黒人である。イギリス黒人はイギリス国内の政治や社会内部との関連でアイデンティティを見出しつつも、同時に他者として表象されている。

### 1. カルチュラル・スタディーズにおける人種問題

ギルロイの師であるS. ホール(Stuart Hall)が編集し、ギルロイも執筆に参加した『帝国の逆襲』を取り上げよう。その序文には次のような文言が登場する。

「『人種』と人種主義の研究によって生まれた問題をカルチュラル・スタディーズの関心の中心にするべき理由は数多く存在する。しかし、人種主義的イデオロギーと人種闘争は、どちらも歴史的記述においても現在の分析においても無視されてきた。少なくとも、本書は、この周縁化を継続することができないというしるしとして受け取られるべきである。またそれは、その『国民的=民衆的なもの』のあり方が、労働者階級の形成と再形成における黒人の役割と黒人闘争を否定し続けてきたイングランドの左翼の偏狭性を正すものとして受け取られる」(Center for Contemporary Cultural Studies 2005 (1982): 7)。

1970年代にホールらが取り組んだのは、マジ

ングとイギリス黒人を結び付けるメディア言説の分析であった。イギリス黒人は労働者階級と言うカテゴリーに内在されることもなく、上述したようにイングランド左翼の偏狭性によって排除されてきた存在であった。イギリス黒人の存在に注目し続けた人物こそギルロイである。ギルロイは、1956年生まれで、ホールの下で博士号を取得、ロンドン大学などで社会学、カルチュラル・スタディーズなどを教えた。その後、アメリカにわたり、イェール大学の社会学部等の教授に就任した。そしてイギリスに戻り、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス&ポリティカル・サイエンス (LSE) の社会学部教授をつとめた。現在はロンドン大学キングスカレッジ教授である。

ギルロイはホールの指導の下で書いた博士論文を元に『ユニオンジャックに黒はない』を出版した。その中で、ホールと共にカルチュラル・スタディーズを牽引してきたウィリアムズが人種と愛国主義、ナショナリズムを結び付けている点に注目している。そしてウィリアムズにとって人種問題は移民から始まり、それが人種や優越性をイデオロギーによって特別なものにするるとされる (Gilroy 2002 (1987) : 51=2017 : 143)。しかしながら、このことはイギリス黒人の問題を人種的優越性のイデオロギーが立ち上げていく契機としてしか捉えきれていないことを意味する。ウィリアムズは「イングランドらしさ (Englishness), 英国らしさ (Britishness), そして国民としての帰属といったイデオロギーとそれ自体歴史的な関係を持つ人種差別の概念を検討することを拒否している」 (Gilroy 2002 (1987) : 53=2017 : 145-146)。ウィリアムズにとって、人種に関する議論は「落とし穴」となっていると指摘したのだ。

ギルロイは、ウィリアムズが人種についてほとんど触れていないことを「戦略的沈黙 (strategic silences)」と呼び、想像の共同体としての国民の人種構成を無視する仕方ではないかとその姿勢を非難する (Gilroy 2002 (1987) : 53=2017 : 145-146)。そして、ウィリアムズの人種に対するスタンスは、人種と「愛国心、排他主義、軍国主義、ナショナリズムを結び付け、それらを強力な言説へと編成する英国らしさの形而上学」の一部に他ならないと結論づける (Gilroy 2002 (1987) : 47=2017 : 138)。

ホールはギルロイの研究を高く評価する。例

えば、1996年の東京大学で行われたシンポジウムの中で、ホールはギルロイに触れ、カルチュラル・スタディーズ内部批判として最も「深いところ」を突いたと表現している (ホール 1999 : 603)。注目すべきは、ホールの言う「深いところ」とは何を意味するのかということである。ホールは明示していない。ただし、『ユニオンジャックに黒はない』で取り上げている以下の事例を見ていくことで、ホールが言う「深いところ」をメディア教育の文脈で解釈し、その含意を検討することはできるだろう。

## 2. イギリス黒人の表象

ギルロイは、『ユニオンジャックに黒はない』の中でフォークランド紛争の翌年1983年に実施された総選挙を取り上げている。保守党 (党首はサッチャー) は、エスニック・マイノリティの雑誌にスーツを着用した一人の黒人青年のポスターを掲載している。そのポスターには次のようなキャッチコピーが付されていた。「労働党は彼が黒人だと言うが、保守党にとって彼はイギリス人である」。そのコピーは「保守党にとって、黒人も白人もいないのです。ただ、人々がいるのみです」と続く。このポスターは、労働党などの公党、そしてウィリアムズら知識人が排除したイギリス黒人を「イギリス人」として定義している。これまでのようなイギリス白人、イギリス黒人、あるいは労働者階級などのカテゴリーではなく、「イギリス人」というより大きなカテゴリーを提示することで、内在する差異は覆い隠されていると言える。ギルロイは次のように言う。

「流行の先端とはいいいがたくその縫製から就職面接が暗示されている若い男性の少し大きめのスーツは、鍵となるシニフィエとなっている。それは、先の文言が約束する肌の色を考慮に入れない形態の市民権を得る対価として、黒人の読者には何が求められているのかを表している。黒人たちは、本当の英国らしさを保証される前に、自分たちを文化的に他と区別するのはすべて捨て去るよう促される。国民文化は若者の服装に現れている。強盗の鍵となるアイコン—ティーポット・カヴァーの帽子とラストファーライのドレッド・ヘア—を奪われ、そこから孤立した彼は、英国文明のシニフィエであるスーツによって救われる。かくして、問題としての黒人の若者というイメージは封印さ



れ、同化可能なものとなる」。(Girloy 2002 (1987) : 65=2017 : 161-162)

ここで表象されているイギリス黒人は、イギリス国内の差異をこえて共有できる価値を表象している。イギリス市民、イギリス文化、イギリス国民であることが、人種的な差異を通じて表象されている。黒人の若者をステレオタイプ化して描き出していたドレッド・ヘア、強盗等に代わる表象がビジネススーツというシニフィエということになる。

先述したように、マスターマンはメディアが選挙を内包し、メディア・イベントとしてしまったことを危惧した。つまり、民主主義がメディア産業の都合に応じて左右される事態を危惧した。それに対してバッキンガムは、公共圏が一部の人にもみ開かれている点を危惧した。ここでギルロイが見出しているのは、そのいずれでもない。政治権力がそのメディア・イベントを利用して、公共圏が政治的に排除されてきた人々—ここではイギリス黒人—を吸収していることである。

ギルロイは、マスターマンのようにメディアが政治権力を包み込むほど巨大なものとしていない。むしろ、政治権力がメディアを利用している。さらにバッキンガムが言うように、公共圏が一部の人にもみ開かれてイギリス黒人のような弱者に閉じているわけでもない。政治権力はむしろ、イギリス黒人を包摂する公共圏を提供し取り込もうとする。

このポスターで表象されるのは、イギリス白人でも、労働者階級でも不可であった。イギリス黒人、厳密には未来ある黒人の若者こそ、公共圏を拡大するために不可欠であったと言えよう。政治権力がメディア・イベントを利用して、人種を再配置する。これこそ、この事例を通してギルロイが捉えたものだろう。このギルロイが捉えたものはウィリアムズをはじめカルチュラル・スタディーズの多くの論者が看過した人種をめぐる表象が有する権力である。ホールがギルロイを評価する「深いところ」とは、このような人種の表象をめぐる政治学である。そして人種上の差異、とりわけイギリス黒人を同化していく新たな形式をギルロイは抽出しようとしたのである。

### 3. イギリス黒人による文化的作業

ギルロイは、1974年にロンドン南部で開かれ

たレゲエの野外フェスティバルに集った群衆の写真を紹介している。上野らによれば、「1974年と言えばまだ、ブリティッシュ・レゲエなるものが『本場』ジャマイカのレゲエに引けを取らない固有のジャンルとして認知されるには至っていない頃だ」(上野他 2006 : 451)。ギルロイはこの群衆と自らを重ね合わせている。具体的には、J. ヘンドリックス (Jimi Hendrix) へ傾斜し、ギターの実習をする自らと野外フェスティバルに集った群衆を重ね合わせて次のように述べる。

「これは、防御的な要素と自己肯定の要素を含みもった、文化的作業だった。奴隷制と植民地主義の記憶、過去の苦しみと目下の抵抗、それらをめぐっての／貫いての、作業なのだ。それによって彼らは、黒人と世界全体にとっての現在を解釈し、そして、黒人と世界全体によってのよりよい未来というものを思い描くことができたのである。(中略) ここにあったのは、解釈するという行為それ自体において、その過程の中で、瞬間的に構成される共同体であり、連帯なのだ」。(Girloy 2016 : 327-328)

個人個人が行う文化的作業 (ギターの実習、DJとしてターンテーブルを回すこと、コンサートに通うこと等) がイギリス黒人にとっては自己肯定としての側面を有していた。そしてその積み重ねから瞬間的に構成される連帯に、ギルロイは希望を見出している。

確かにギルロイがギターの実習を始めたのは、ヘンドリックスというメディアに登場する、メディアによって構成されたスターに触発されたものである。さらにレゲエのコンサートに通うことも十分に浸透していなかったとはいえず、メディアに触発された消費行動と言えなくもない。

しかしながらここで想起すべきは、DJ文化である。イギリス黒人は使用されなくなったアナログレコードを再利用して、音楽を視聴するだけにとどまらない固有の文化を作り出した。DJがターンテーブルを回し、リズムを刻んだ。観衆は、そのパフォーマンスを解釈してダンスとして表現しなおす。そのダンスの様子を見ながら、DJたちは曲を選択し、リズムを変えた。ここには、先述したレゲエコンサートと同様の瞬間的な連帯が作り出されている。制作者 (DJ) と消費者 (観衆) の境界線は曖昧であり、お互

いの参加によって連帯が作り出されている。さらに言えば、この参加の形式はターンテーブルを回す、身体をリズムに合わせるなど作業という形式である。

DJが触媒となって、DJと観衆が呼応し合い連帯を作り出す。それは、結果的にハーバーマスの公共圏とは異なったもう一つの公共圏を作り出す。ギルロイは、この公共圏がイギリス黒人によって形成されている点に注目している。イギリス黒人は、既存の白人労働者階級とは異なった存在である。さらには、移民として外部からイギリスにやってきた存在でもない。イギリス国内の労働者階級というカテゴリーからも、移民に象徴される黒人というカテゴリーからも疎外された。それにもかかわらず、彼らはイギリス内部で生まれ育ったゆえに、イギリス内部にそのアイデンティティを有する特殊な存在である。この二重の疎外性を有するイギリス黒人によってハーバーマスの公共圏とは異なる公共圏は構築されたのである。

### 第3節 政治的参加型メディア教育の実践

#### 1. メディア制作の教育実践—人種の表象—

バッキンガムが調査研究にかかわった教育実践に注目しよう (Buckingham 2003a: 166-167=2006: 205-207)。英語の授業で、14歳の男子6人が11歳向けのメディア・コンテンツを制作した教育実践である。彼らは『文なしアパート』と題するホームコメディの予告編を制作した。この作品には、共同生活を送る4人が登場する。男嫌いのフェミニスト、ゲイの幼児性愛者、マッチョなギリシャ人、たかり屋の売春婦である。生徒6人が作品を発表する際、教師やクラスメイトはキャスティングの設定が11歳には不適切であると指摘した。だが彼らは、「検閲」であるとそれらを一蹴した。さらに、誇張された・ステレオタイプ化されたキャスティングではないかとの批判に対しては、ホームコメディにそのようなキャスティングは期待されたものであると反論した。登場するフェミニストにはクラス担任の名前を付けた。そして、マッチョなギリシャ人という登場人物を提案し演じた生徒は、ギリシャ系の生徒であった。いわば彼は、自らの人種を自嘲的に演じたのである。

まず留意すべきは、人種の描き方だろう。結論的に言うならば、制作した生徒らは、差別や

人権などの民主的な価値に関する認識が乏しいと言えよう。生徒らは、見方によっては人種に関する支配的な表象を自嘲的に演じて、悪ふざけしているように思える。一見、言語とは異なるメディア (映像) を使用して、先鋭的な教育実践を行っているようにみえるが、その実態は生徒らが民主的な価値を看過し、アイロニカルに悪ふざけし合っているだけとも言えよう。生徒の活動がアイロニカルな悪ふざけに終始するならば、メディア教育としての可能性は形式的なものにとどまってしまう、形骸化してしまうだろう。

さらに、この教育実践のプロセスにも注目すべきと考える。というのも、繰り返せばバッキンガムは次のように考えている。メディア教育の目標は「教えることと学ぶことより内省的な方法の発展である。そしてそれ (メディア教育の目標) は、子どもがメディア・テキストの『読み手』と『書き手』の両方として、自らの活動を振り返ることができ、そこで作動しているもっと広い領域に及ぶ社会的、経済的要素を理解できるようになること」(Buckingham 2003a: 14=2006: 22) である。そのため、彼にとってメディアに対する批判的な分析は「合意を得た、あるいは前もって準備された位置に到達するかどうかの問題ではなく、対話のプロセス」である (Buckingham 2003a: 14=2006: 22)。ここでの言語活動—バッキンガムの言う対話—には、一定の利害関係が複雑に絡み合い、表象をめぐる批判や論争が含意されている。生徒らのコミュニケーションは、単に合意に向けてまっすぐに進んでいるわけではない。利害関係が複雑に絡み合い、せめぎ合っているとバッキンガムは認識する。

先述したように、『文なしアパート』を制作した6人とクラスメイトの間にも、お互いの利害関係が複雑に絡み合ったせめぎ合いを確認できる。そして、バッキンガムによれば、結果的に『文なしアパート』を制作した6人は「自分たちの作品についての報告書では、自らの作品を『ステレオタイプ』で『政治的に公正ではない』とまで説明し、最終的に『リベラルな』テレビ局で放送されるかどうか疑わしいとした」(Buckingham 2003a: 167=2006: 207)。彼らは映像を制作し、それを資料としてクラスメイトと話し合う中で、自らのものの見方や固定観念を反省的に振り返り、自覚し、修正したと言えよう。このプロセスには、渡邊が描き出



した個人と環境の相互作用的な循環を確認できる。

確かに、教師やクラスメイトらは、『文なしアパート』のキャスティングがオーディエンスの発達段階に適していないことや誇張された・ステレオタイプであることを批判している。そして、制作した生徒らはそれに反論している。その意味でこの実践において、参加者同士は価値観をめぐってせめぎ合っている。しかしながら、クラスメイトらは根拠（オーディエンスの発達段階、人種に関する配慮の欠落）を示し、批判している。彼らは発達段階の考慮やステレオタイプの表象を問いつつ、『文なしアパート』自体を理解しようとしている。作品自体の独自性が批判されているわけではない。作品の背後に見え隠れする人種に対する偏見や人権意識の欠落を批判している。

『文なしアパート』には自らの人種を自嘲的に演じた生徒もいた。人種やアイデンティティにかかわるナイーブなものも表象されている。クラスメイト、さらにはバッキング自身もこの点にどこまで意識的であったかは定かではない。しかしながら、この活動がせめぎ合いの場であると同時に、人種をめぐって多様性や個性の重要性を指摘し合う場であった点に目を向けるべきだろう。ここではステレオタイプや人権意識の欠落を断罪するのではなく、対話し承認し合う中で新たな規範意識が育成されたと言える。

バッキングの立場から見れば、生徒たちはメディア・コンテンツを制作し、クラスメイトとの対話する中で、自らとメディアとの関係、ステレオタイプや人種といった概念学習を行ったと解釈できよう。しかしながら、彼らが結果的に社会的に構成し、たどり着いた新たな規範意識は、概念学習や振り返りによって生じたのだろうか。換言すれば、この実践で生じたことを個人レベルの概念学習、振り返りのみで説明することは可能だろうか。

## 2. イギリス黒人の文化形成

### —ギルロイからの示唆—

ギルロイは、労働者階級という統一体がほどけ、人種というカテゴリーを軸に労働者階級が再編される時代を生きた。彼は、そのような中でイギリス黒人が独自の文化実践を行っている点に注目する。例えばイギリス黒人は、CDが浸透し、アナログレコードがゴミとなり始めた

ころに、そのごみを活用した新しい文化、つまりDJ文化を作り出した（毛利 2012：156）。ここで言うDJとは、ディスコ、クラブ等でレコードやCD内の音楽データを利用し、場の雰囲気から楽曲を選曲して音を奏でる者である。曲と曲の切れ目をスムーズにつなぐミックスやアナログレコードを指先でスクラッチする技術を駆使して、その場を盛り上げていく演者である。ここでレコードは単にかけられ聴かれるだけではない。さらにレゲエにおいてDJは、ダブカットやヴォイスレスヴァージョンで作られた素材へ働きかける<sup>1)</sup>。消費は外側へ向かい、もはや私的で、受動的で個人的なプロセスではない（Gilroy 2002（1987）：284-285=2017：453）。

DJやDJ文化にかかわる若者たちは、オーディエンスとしてメディアと接触し、メディア利用を通してメディアとの関係を転倒させ、新たな文化を創造した。上野俊哉の言うように、DJ文化において、表現者（送り手）であるためには、まず消費者（受け手）として応答しなければならないからである（上野 1999：207）。ギルロイによれば、「（黒人音楽文化の）特徴とは、即興性や自然発生性やパフォーマンスへの志向」である。そして、この特質は次のようなことにつながる。

「（黒人音楽文化の特質は）ヨーロッパ文化一般、とりわけ音楽コンサートの消費の一つの特徴である、芸術と生活の区分を解消しようとする試みを軸にしている。黒人のアーティストたちは彼らを観衆から分け隔てる諸々の仕組みを利用するのではなく、克服しようとする。アーティストと観衆の関係は対話的な儀礼によって変容され、ときにカタルシスを起こさせ、コミュニティを象徴ないし創造しさえするかもしれない集合的過程において、目撃者は参加者として積極的な役割を獲得する」（Gilroy 2002（1987）：289-290=2017：459-460）

黒人音楽文化は、対話的な儀礼によってアーティストと観衆の関係を変容させる。最終的には集合的過程—コミュニティを創造するかもしれない—において、目撃者は参加者としての役割を獲得する。上野が言う表現者（送り手）をギルロイはアーティストとして、上野が言う消費者（受け手）をギルロイは観衆として表現している。

一見このような黒人音楽文化に象徴される文

化形成は、自然発生的に生じていると考えられる。実際、『ユニオンジャックに黒はない』を執筆した時点のギルロイもこの傾向を確認できる。無批判に黒人たちが作り出す文化を称揚する側面がある。しかしながら、2000年に出版した『キャンプの間』の中でギルロイはこのような文化形成がなされる過程に注目している。「音楽や楽器演奏能力を用いて説得力ある形で通じ合うためには、それらを学びとって練習しなくてはならない」(Gilroy 2000: 133)。ポイントは、ギルロイが音楽や音楽演奏能力を「学びとるもの (learn)」と捉えている点である。例えば、ピアノやギターの演奏では、物質としてのメディア (ピアノやギター等) と演奏者の指先などの身体が、学習を通して慣れ親しんだ関係を取り結んでいく。ここでギルロイは、利用者が身体レベルも含めていかにメディアと関係を取り結んでいくのかを問う。「ギターを弾く」「DJとしてターンテーブルを回す」などの身体を使用して物質としてのメディアと関係を結び、文化形成に関与する行為を文化的作業と呼ぼう。

### 3. もう一つの公共圏

1980年代にホールが展開したメディア論はおよそ次のようなものであった。彼はメディアを通じた情報伝達を「エンコーディング」と呼ぶ。「制作の制度的社会的関係は、それがモノとして現実化されるためには言語の言説的なルールを通過する必要がある」(Hall 1980: 130)。他方で、「エンコーディング」された言説はオーディエンスによる解釈、すなわち「デコーディング」によってはじめて意味をもつ。「社会的有用性や政治的効果」も含め、「効果を作り出すのはデコーディングという視聴行動である」(Hall 1980: 130)。オーディエンスは同じメッセージであったとしても、おのおの異なった解釈を行う (Hall 1980: 130)。この意味付与のプロセスが「デコーディング」である。

ここで彼は、記号と意味が必然的に照応するものではなく、誤解=誤認の可能性が常に残ることに焦点を当てている (小笠原 1997: 53)。この意味でホールとギルロイに連続性を見出すことは可能である。しかしながら、ホールの議論 (エンコーディング/デコーディングモデル) では、認識レベルのオーディエンスの構築を捉えることはできても、それ以外の、中でもオーディエンスのあり方を物質レベルで規定してい

るモノ=テクノロジーの問題を積極的に捉えることはできない (土橋 2003: 53)。つまり、1980年代以降のホールは認識レベルにおけるメディア理解に焦点を当てる。そのため、ギルロイの言う文化的作業を把握することができなかった。ギルロイは、認識レベルにおける「せめぎ合い」が生じる前の、「物質レベルで規定しているモノ=テクノロジーの問題」に焦点をあて、文化的作業の必要性を描いている。

しかしながら、「ギターを弾く」「DJとしてターンテーブルを回す」という行為は物質レベルにおけるメディア経験としてのみ理解するだけで十分だろうか。例えば、ギルロイは、ヘンドリックスをはじめとするブルース・ギタリストたちに触発された経験を有する。その影響を受けて10代で初めてギターを手にし、その楽器をプレイするためにどれほど努力したのかを率直に認めている。さらに次のようにも述べる。「自分はさまざまな側面から構成された存在だけれども、なにより黒人であると同時にイングリッシュであると認められたいという欲望があった。私はこの事実を隠そうとはまったく思わない」(Gilroy 1993a: 68)。彼の楽器との関わりは決してイギリス社会における黒人の位置と無関係ではない。ギルロイのメディア経験はイギリス黒人としてのアイデンティティと関わる問題でもあった。だからこそ彼が描き出すのは、イギリス黒人が楽器を通して文化形成にいかに参加し、同時にイギリス黒人がイギリス社会の中でいかにアイデンティティを作り上げていったのかという様相である。ここに『文なしアパート』の授業実践において、制作者に生じた変化の要因を解く手がかりがあると考えられる。

ハーバーマスが描き出したように、サロンやカフェでの会話は、政治的な問題を真剣に議論する政治空間を活性化させた。これはシティズンシップ教育における言語を中心とした政治主体の形成と重なり合う。しかしながら、ギルロイにしたがうならば、それは言語のみを介するとは限らない。イギリス黒人のようにそのような政治空間から排除された人々は、楽器や使用されなくなったアナログレコードを使用して、異なる政治空間を作り出していた。イギリス黒人にとって、「ギターを弾く」「DJとしてターンテーブルを回す」とは、メディアとの関係を構築するだけにとどまらない。さらには、言語を介した振り返りを通して、物質としてのメディア—このケースでは、ギターや一枚一枚の

レコードとの関係を認識するだけでもない。

むしろ、それらの行為はハーバーマスが理念型として描き出した西洋中心の公共圏とは異なる、もう一つの公共圏を形成することにつながる。同じ西洋内で黒人たちが楽器を演奏する中で、あるいはDJがターンテーブルを回す中でもう一つの公共圏が構築された。ギルロイが描き出すのは、参加が公共圏を構築することにつながることである。それに対してバッキンガムは、あくまで概念学習、振り返りなどの個人レベルの学習に授業参加の意味を集約させる。その意味で、両者には決定的な差異がある。

このように考えるならば、メディア制作の教育実践において、生徒はバッキンガムが認識していない文化的作業を行っているとは解釈できないだろうか。つまり、メディアと物質レベルで結びつき、身体を使用した作業を行っている。イギリス黒人たちは文化的作業を通して、これまでのコンサートやアナログレコードやCDの視聴とは異なる参加型の文化形成を行った。そして、イギリス黒人たちが文化的作業を通してもう一つの公共圏を形成したように、生徒たちもメディア制作という共同かつ文化的作業を通してもう一つの公共圏を作り上げた。これは個人による制作活動とは異なり、共同性を伴う作業である。

『文なしアパート』の制作者6人に確認できた変化は、もう一つの公共圏が作り上げたものと解釈することも可能である。ギルロイを手がかりに、文化的作業という概念を導入することで明らかになるのは次のことである。生徒らには、メディア制作の教育実践においてメディア・コンテンツを制作する。この行為はメディアの外部から振り返りに基づいてメディア経験を理解するのではなく、メディア内存在としての生徒がクラスメイトや教師と連帯しつつもう一つの公共圏を作ることに開かれている。バッキンガムが看過したのはこの公共圏の存在である。

## おわりに

本研究は、政治的プロジェクトとしての参加型メディア教育を再解釈する試みであった。まず、本研究で注目したのは、ハーバーマスの公共圏概念とシティズンシップ教育の連続性であった。この連続性に注目するならば、言語によるコミュニケーションを通して、生徒は政治

主体（シティズンシップ）を形成すると同時に、この行為を通して、社会的に規範意識を構築することを示した。

しかしながら、言語の問題はリテラシーの有無に集約できず、人種問題へと私たちを導く。そこで本研究は、ハーバーマスの視座にしたがいつつも、言語以外のメディアを使用した文化形成のあり方を模索した。その手がかりがギルロイである。彼は、イギリス黒人による文化形成に注目した。イギリス黒人らは言語ではなく、音楽や楽器、アナログレコードなどのモノを使用して文化を形成する。この観点からギルロイが重視した「人種」の表象に焦点を当て、バッキンガムの教育実践を再解釈した。

ギルロイによるイギリス黒人の文化形成論は、バッキンガムが十分に認識していないメディア教育の側面を明示している。それは言語を介したコミュニケーションを通して形成されるハーバーマスの公共圏ではなく、文化的作業を介したもう一つの公共圏を構築する可能性である。バッキンガムは個人レベルに還元できない批判を唱えつつも、それが最終的に振り返りや概念学習といった個人レベルの学習論へ集約する。そのため、情報発信や振り返りの「後のこと」を具体的に描き出すことができていない。それに対して本研究は、個人レベルで自らのメディア経験やメディア利用を振り返るのではなく、文化的作業を通して規範意識を他者と共に構築する可能性を明示した。

## 注

- 1) ダブカットとは、すでに録音した曲にエコーなどを加え処理し、別の曲として作り直すことである。

## 文献

- Buckingham, D., (2003a) *Media Education: Literacy, Learning and Contemporary Culture*, Polity. (= (2006) (鈴木みどり他訳)『メディア・リテラシー教育—学びと現代文化—』世界思想社。
- (2003b 1st. publish 2000) *The Making of Citizens: Young People, News, and Politics*, Routledge.
- Center for Contemporary Cultural Studies (2005 1st. publish 1982) *The Empire Strikes*



- Back: Race and Racism in 70s Britain*, Routledge.
- Gilroy, P. (1993a) It Ain't Where You're from, It's Where You're at: The Dialectics of Diaspora Identification, P. Gilroy *Small Acts*, Sepernt's & Tail. (= (1997) (藤永泰政訳)「どこから来たかじゃねえんだよ, どこにいるかなんだ」『現代思想』第25巻11号, 青土社, 170-187)。
- (1993b) *The Black Atlantic: Modernity and Double Consciousness*, Harvard University Press. (= (2006) (上野俊哉他訳)『ブラック・アトランティック—近代性と二重意識』月曜社)。
- (2000) *Between Camps: Nations, Cultures and the Allure of Race*, Routledge.
- (2002 1<sup>st</sup>. publish 1987) *There Ain't No Black in the Union Jack: Cultural Politics of Race and Nation*, Routledge. (= (2017) (田中東子他訳)『ユニオンジャックに黒はない—人種と国民をめぐる文化政治』月曜社)。
- (2016) *Between the Blues and the Blues Dance: Some Soundscapes of the Black Atlantic*, M. Bull, *The Auditory Culture Reader* (2<sup>nd</sup>. Edition), Bloomsbury, 323-333.
- Habermas, J. (1983) *Moralbewußtsein und Kommunikatives Handeln*, Suhrkamp. (= (2000) (三島憲一他訳)『道徳意識とコミュニケーション行為』岩波書店)。
- (2013 1<sup>st</sup>. publish 1990) *Strukturwandel der Öffentlichkeit*, Suhrkamp (= (1994) (細谷貞雄他訳)『公共性の構造転換—市民社会の一カテゴリーについての探究 第2版』未来社)。
- Hall, S. (1980) Encoding/Decoding, S. Hall et al., eds., *Culture, Media, Language*, Routledge, 128-138.
- Masterman, L. (1989 1<sup>st</sup>. publish 1985) *Teaching the Media*, Routledge. (= (2010) (宮崎寿子訳)『メディアを教える—クリティカルなアプローチへ』世界思想社)。
- The Advisory Group on Citizenship (1998) Education for Citizenship and the Teaching of Democracy in School, Final Report of the Advisory Group on Citizenship, *Qualification and Curriculum Authority*, 1-86. (= (2012) (鈴木崇弘他訳)「シティズンシップのための教育と学校で民主主義を学ぶために」長沼豊他編『社会を変える教育—英国のシティズンシップ教育とクリック・レポートから』KS21, 111-209)。
- アドルノ, Th. (2011 1<sup>st</sup>. publish 1963) (原千史訳)「テレビと教育」アドルノ, Th. (原千史他訳)『自律への教育』中央公論新社, 71-95。
- 上野俊哉 (1999)『ディアスポラの思考』筑摩書房。
- 上野俊哉他 (2006)「訳者解説」P. ギルロイ (= 上野俊哉他訳)『ブラック・アトランティック—近代性と二重意識』月曜社。
- 大久保正弘 (2012)「わが国における Citizenship Education の導入の可能性について」長沼豊他編『社会を変える教育—Citizenship Education—英国のシティズンシップ教育とクリック・レポートから』キーステージ21, 19-100。
- 小笠原博毅 (1997)「文化と文化を研究することの政治学—ステュアート・ホールの問題設定」『思想』873号, 岩波書店, 41-66。
- オンタリオ州教育省 (1992) (FCT 訳)『メディア・リテラシー—マスメディアを読み解く』リベルタ出版。
- ブルデュー, P. (櫻本陽一訳) (2000)『メディア批判』藤原書店。
- ホール, S. (1999) (本橋哲也訳)「旅するカルチュラル・スタディーズ—国際的対話の諸条件」花田達朗他編『カルチュラル・スタディーズとの対話』新曜社, 563-613。
- 毛利嘉孝 (2012)『増補 ポピュラー音楽と資本主義』せりか書房。
- 渡邊満 (1999)「コミュニケーション的行為理論による道徳教育の可能性」『兵庫教育大学研究紀要 第一分冊』19巻, 93-101。
- (2015)「シティズンシップ教育とこれからの道徳教育」小笠原道雄編『教育的思考の作法—教育哲学の課題「教育の知とは何か」—啓蒙・革新・実践』福村出版, 282-298。

## ブログ

- Buckingham, D. (2018a) Going Critical  
<https://davidbuckingham.net/2018/07/18/going-critical/> 2018.10.30.access

## 講演

- Buckingham, D. (2018b) Media education in the

---

age of digital capitalism  
2018/10/11@Hiroshima University